

佛性論の研究

石 原 良 純

序 世親教学に於ける如來藏思想の問題

世親教学に於ける如來藏思想中、特に彼の思想の円熟を物語ると言われる『仏性論』が、真諦訳の漢訳しか現存せず、即ち梵本及び西藏本並びに真諦訳以外の漢訳本が現存しない点から、世親の著作かどうかという問題をひき起した。近時、月輪、服部西氏の見解によれば、『仏性論』は『空性論』の異訳ではないかと言われている。^①

更に『攝大衆論疏』世親疏、真諦訳が「界」について如來藏思想的な解説をほどこしており、同本の玄奘訳には、そうした解説が見出されない点、換言すれば、これらの世親の如來藏思想が、真諦三藏を通さずには見出されない事になり、注目さるべき問題である。果してこれらの如來藏思想が世親のものでないのか、それとも真諦三藏のみが世親の真意をくんで訳したものであつたかは簡單には判明し難い事であり、今はこうした看取に關する問題がある事を一應考えながら、『仏性論』の研究を手をつけたわけである。

第一章 空思想と如來藏

空は理論的にも實踐的にも仏教の根本である。大乗仏教では特に人法二空を強調した。しかるに才二期大乗至典の成立と共に、仏性、如來藏思想が大いに鼓吹され、一見空に對立する有を主張するかに見られるが、二空を主張した大乗仏教の立場と矛盾してゐる様に見える。もしこれが空思想に立脚してゐないとするれば、實我を主張する外道として大乗仏教から排斥されねばならない。そこで如來藏思想が、空思想に根ざしてゐるか否かは大きな問題である。又般若空思想を闡發する才一期大乗至典について成立した至典であるから、空に對立する様な有を説く筈はないであらう。然らば、空思想の洗礼を受けた才二期大乗至典の有は、空思想と如何なる關係をもつものであらうか。

かゝる意味から、『涅槃至』の「一切衆生悉有仏性」、『勝鬘至』の「自性清淨心」及び『性論』の「人法二空所顯眞如」を中心にして、空思想と如來藏思想との關係をみたのである。

そこで、『涅槃至』師子吼菩薩品第十一の③に説く所から概説すると、仏性が實我を否定した無我に對する回教を更に否定したいわゆる「空亦復空」として二重の否定を通して肯定された所の批である事が知られる。そして、一切衆生はすべて仏性を有しているのであるが、無明によつてそれを見る事が出来ないといつてゐる。即ち「一切衆生本來空」というその事が、「一切衆生悉有仏性」と表現され、「仏性が煩惱によつて覆われてゐる状態にあるのが衆生」④であり、煩惱の別なく、修行によつて煩惱の隨處をなくして、仏となるべき事を説いてゐるのである。従つて仏性とは單なる我ではなく、我と次元を異にする大我として、空を積極的に正しく理解され体得される爲に、より宗教的に表現されたものであり、「空思想の發展形態として生れた思想」⑤である事が理解されるわけである。

尚、空思想を根底として発展した思想である事は、『勝鬘經』及び『仏性論』に於ても明確に說かれているが、今は略する。

第二章 唯識觀と如來藏

『仏性論』が世親の依であつてもなかつても、唯識觀と如來藏思想との關係は重要な問題である。若し世親の依であつたとしたら、世親論師の上にこの面々が如何に成立つてゐるかという問題が興味深く言及されねばならないし、又、世親の依でないとしても中觀仏教に對する瑜伽唯識仏教と如來藏思想が、如何なる關係に於てあるかを論究する事は、重要な事である。かくいすれの場合に於てもこのテーマは重要な意味をもつものである。本章に於ては主として三性・三無性^⑥によつて現わされた『仏性論』の看者の唯識觀が、如何なる系統の如何なる類形のものであり、それが如來藏思想と如何に結びついてゐるかを論究する事によつて、『仏性論』の唯識觀の意義を明そうとこころみた。

その結果を概説すると、『仏性論』に於ては勝義の立場から三性を説き、仏性がこの三性をもつて体となすから、三性は如來性即ち仏性を攝し盡す事を述べてゐる。そして無相性である分別性を執する事によつて有となる依他性が、有と無という相對的な能分別、所分別の關係から、唯識無境が境識俱泯となる分別依他の二無性の同一無性が、眞實性として說かれている。従つて性と相が永別の關係にあるのではなくして性相融即を説く眞諦系の三性說である事が理解される。^⑦ここでは境の無を觀じて識の有を滅するといふ事が重要である。そしてこれを道倫

の三門にあてはめるならば、唯識無境を説く事がオニ塵識理門の三性説であり、二分依他性を説く事が、オニ染淨通門に属するものと言える^⑧

以上の事から、唯識観は *Jein* から *Sollen* へを示すものと云う事が出来るならば、如末藏思想は如末藏の三義に於ても知る事が出来る様に *Sein* と *Sollen* の関係を示すものと云う事が出来る。従つて『仏性論』に於て、唯識観の究極が、如末藏思想として必然的に展開されている事も、宗教的欲求として当然な事であると、考えられるのである。

オ三章

『仏性論』の如末藏義^⑨

(如末藏の三義)

(略)

オ四章

仏性の特相^⑩

(略)

結論

仏教の発達変遷、若しくは仏教なるものは仏陀観を中核となし、仏陀観を根柢となしてゐると言われるが^⑪、仏教が仏の教であり、仏に成る教である事から、その当爲たる仏を如何に観るかを重要視されるのは、当然なわけである。否、仏陀観を問題にしない仏教があり得るとしたら、釈尊の戒道も無意義となつてしまつてあらう。

亦、仏陀繩発達の尸史上、軌範によつて初めて明され、それが無着にもそのまま受けつがれた。開合の三身説が、世類に到つては、開合の三身説へと展開していつたと言われている。即ち前者は、法身を理と智との冥合とみたのに対し、後者は不二である理と智とを分ち、法身は單に理とみた所に、世親教団内での仏身論の理論的進展が認められるのである。⁽¹³⁾

それでは、『仏性論』に於てはどうであらうか。無受異岳に法身の五徳に就て、

「復次五徳者、一不可量、二不可数、三不可思、四無与等、五究竟清淨」⁽¹²⁾

と説き、応身の勇用広大に就ては

「復次応身者、勇用広大故、此身体有三徳。一大般若、二大禪定、三大慈悲」⁽¹⁴⁾

と説き、化身の功徳に就ては、

「復次化身者、大悲爲本、禪定爲受現、般若能令有五種能」⁽¹⁵⁾

と説かれてゐる。即ち法身に不可量、不可数、不可思、無与等、究竟清淨の五徳を説くが、これは明かに法身が理と解されてゐるのであり、応身は、大般若、大禪定、大慈悲の三徳が説かれてゐるが、理と智との冥合たる自他受用身であり、化身は大悲をもとした他受用身として説かれ、かゝる意味から、『仏性論』の三身説は開合の三身説である事が理解される。勿論、仏性という概念は、『仏性論』に於ても理法を主体的にみた所に生れたものと考えられる。更に仏性に、圓滑性、事能相を説くに至つては⁽¹⁶⁾、單に法身の理としての段階から、他受用身亦是自他受用身へ、段階にまで至つてゐる事が知られる。即ち仏性は單に理としての法身にとどまらずに有爲の願行を通ずる事により、応身とみられた事を意味するものであり、報身を全分他受用身とする淨土教への歩みよりを示すものと考えられる。更に亦、所攝藏の藏の意味が「單に

如來が一切の衆生を統攝するという抽象的な概念から、迷悟、淨穢を結びつける媒介的な場として、如來の大悲が一切衆生を攝取すると言ふ具體的實踐に転換してくる^⑦と解されている事は、如來藏思想が淨土教に思想的根柢を与える事を意味するものともいえる。この事から考へると所攝藏に

「光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨」

或は

「月影の いたらぬ里はなけれども ながむる人の 心にぞ住むし
の精神が 汲みとられるわけである」

(參考資料)

① 月輪賢隆「究竟一乘空性論に就て」(日本仏教學協會年報七一年一一—一三九頁)
服部正明「仏性論の一考察」(仏教史學才四卷才三四号一六—三〇頁)参照

② ①大正三一・一五六、

④大正三一・二六四、b

上田義文著『仏教思想史研究』(三一六—三二五頁)参照

③ 縮刷・盈六・三一・左

④ 高峰直道「空性論における如來藏の意義」(印度學仏教學研究才一卷才二号一二頁)参照

⑤ 山口益著『般若思想史』(九頁参照)

⑥ 大正三一・七九四・a—七九五c

⑦

唯識説に於て、眞諦系と玄奘系との間に立場の相違が存する事はいすれの學者も認めておられるが、その二つの立場の相異に關する見解が全ての學者に於て必ずしも一致してゐるとはいえない。今は上田博士の著書をもとにして解釈を進めて行つたのであるが、この見解には、鋭い批判説も出てゐるのでこゝに眞諦系と玄奘系とに關する問題をとりあつてゐる最近の論文を提示しておく。

(1) 上田義文著 『仏教思想史研究』 及び 『瑜伽行派における根本眞理』 (宮本編 『仏教の根本眞理』 四八七—五一二頁)

(2) 山内得立著 『実存と所有』 中 「盡所有と如所有」 (三三五—三六四頁)

(3) 田中順照 「概大乗論に於ける唯識観」 (仏教文化研究才四号一〇七—一一六頁) 及び (印度学仏教研究才三卷才一号ニ三九—二四一頁)

(4) 鎌田茂雄 「仏性論の三性説についで」 (印度学仏教研究才二卷才二号一七一—一七三頁)

(5) 春日井眞也 「眞諦三藏のアビダルマ学」 () 才三卷才二号ニ七〇—二七六頁)

(6) 勝又俊教 「唯識の立場と中道説」 () 才二卷才二号ニ六〇—二六三頁)

及び 「唯識説の二つの立場」 (宮本還厂 『印度学仏教論集』 三三九—三三八頁)

(7) 勝呂昌一 「二分依他性説の成立」 (宮本還厂、三三九—三九〇頁)

序井伯壽著 『仏教双論』 上巻 (四〇四—四一九頁)

鎌田茂雄 (前掲 ⑥)

上田義文 (前掲 ⑦—一頁) 参照

⑧

大正三一・七九五・C—七九六・C

宇井伯壽著『唯心の史蹟』(七・七三・八三・八四頁)

同 印度哲学史 (四・八・四〇・九頁)

水谷幸正「如來藏と仏性」(仏教大學學報オ三十一号三八—五九頁)

香川孝雄「如來藏の諸相」(アタテイパオ三号一四—二四頁)

藤堂恭俊「無量壽經論序觀」(仏教大學マ報オ二六号二八頁) 参照

⑩ 大正三・七九六—八一三・二

勝又俊教「如來藏思想の發達に就ての一考察」(印度哲学と仏教の諸問題一四三—一五九頁)

香川孝雄「勝曼至の研究」(仏教大學研究紀要オ三二号六〇—六七頁) 等参照

⑪ 宇井伯壽著『仏教思想の基礎』(二二頁参照)

⑫ 前掲⑩(三九九—四〇六頁参照)

⑬ 大正三・八一〇・六

⑭ 大正三・八一〇・六

⑮ この事に関してはおも四章でふれておいた。

⑯ 藤堂恭俊(前掲⑤)二六—二七頁引用)